

ダーウィニアン社会学へのイントロダクション

——それは、「何でない」のか？——

桜井芳生

【要約】現代ダーウィニズム生物進化論の成果に立脚した「ダーウィニアン社会学」とでも呼びうるアプローチを構想している。この立場にかんしては、さまざまな誤解が発生しうる。本稿は、このようなありうべき誤解をただしていくことで、本アプローチのアイデンティティーを明示化しようとする試みである。

【ダーウィニアン社会学の定義】

いわゆる「進化心理学」をはじめとする現代ダーウィニズム生物進化論の成果をふまえることで、既存の社会学の理論的実証的蓄積をヴァージョンアップする試みを私はおこなっている。この方向性を暫定的に「ダーウィニアン社会学」と呼んでみよう。この構想ならびに各論の一端をいくつかの機会にお話する機会にめぐまれた。その結果、本アプローチの性格づけについて、一般の社会学者や、一般人のかたには、無用の誤解が生じやすいこともわかった。本稿は、これらのありそうな誤解をひとつひとつただすことによって、本アプローチの性格づけについて明確化しようとする試みである。

議論の都合上、本稿で呼ぶ「ダーウィニアン社会学」の内包が、いかなるものであるか、約定的に定義しておきたい。すなわち、

↓

本稿では、【「現代ダーウィニズム生物進化論の知見を、「ふまえた」上で、理論的経験的研究をおこなう社会学」を、「ダーウィニアン社会学」と、呼ぶ。】ことにする。

【ダーウィニアン社会学は、ダーウィン進化論の「アナロジー」ではない】

まず、ダーウィニアン社会学を構想している、という、「進化論のアナロジーで、社会を見ていこうとなさっているですね」といわれることがよくある。

アナロジーは生産的である場合が多いし、ひとがどのようなアナロジーでどのような対象を把握しようとしても自由であろう。

しかし、すくなくとも、われわれのアプローチに関しては、ちがう。われわれは、現代ダーウィニズム生物進化論がもたらした諸知見（発見）を、「ふまえて」（それに依拠して）、社会学的諸命題を構築しようとしているのである。けっして、進化論の「アナロジー」をやろうとしてのではない。ダーウィン進化論「そのもの」に依拠しようとしているのである。まずは、その点誤解なきようにねがいたい。

【「進化論的発想」は、危険な言葉である】

ダーウィニアン社会学をやっている、という「進化論的発想で、社会学をなさろうというのですね」ともときにいわれる。この「進化論的発想」という言葉も危険な言葉だろう（自戒も込めて）。この言葉では、「進化論のアナロジーで社会学」をやろうとしているのか、「進化論の知見に依拠して社会学」をやろうとしているのか、が、混同されやすいからだ。くりかえすが、われわれは、明確に、「前者でなく、後者」をめざす。

【「進化」という言葉は、危険な言葉である】

そもそも、「進化」という言葉が、（現代）ダーウィニストと普通のかたがたとは、かなり違った理解をされているようである。ある言葉をどのような意味でつかうかは、基本的に各人のかってなので、このこと自体は、とくに責められるべきではない。しかし、多くの方は、自分の「進化」という言葉への漠然とした理解を、ダーウィン進化論にあてはめてしまい、無用な誤解をかさねている場合が多々みうけられるようである。

ダーウィニストが、「進化 evolution」という言葉を多用してしまったこと自

体、(あと智恵だが) かならずしもベストの選択ではなかったのかもしれない。(よく知られているように、ダーウィン自身は、evolution という言葉をあまりつかわなかった)。

ちなみに、本稿で、「現代ダーウィニズム」とか、「現代進化論」とか、いう場合には、ハミルトン以後のダーウィニアン生物進化論をおおむね指している。

【ダーウィニズムのエッセンス】

ここで、ダーウィン理論のエッセンスを私なりにまとめておくと、今後の議論において好都合だろう。ダーウィン理論のエッセンスは、意外に簡便である。

1. 自己複製子 (レプリケーター) の存在

まず、ダーウィン進化論のはなしがはじまるためには、自らの情報を自己複製するモノがなくてはならない。すなわち、生物においては「遺伝子」である。この自己複製子が、次の時点(次の世代)に対して、自己を「一より大」の量的程度において、自己複製(多産的再生産)する。これが必要である。

2. 自然選択 (環境による選択)

これらの「多産」された子孫たちが、環境によって選択(ふるいわけ)される。ただし、この環境のなかには、他の自己複製子たちも含まれる。すなわち、他種・他個体との「競争」もこの「環境」のなかには含意される。こうして一時点(一世代)あとにおいて、生き残った自己複製子たちの頻度(全体のなかで多・寡)がきまる。こうして、「生んでは、生き残ったり・死んだり、(その生き残ったものが、また)生んでは、生き残ったり・死んだり…」というゲームを繰り返していく。この「生殖時までの生き残り/生殖時以前の死滅」のふるいわけをする「環境」のことを生物界では、「自然」とよぶ。よって、このメカニズムは、「自然選択」と呼ばれる。

3. わずかな変異

上記の自己複製の精度（忠実度）は、かなり高くなければならぬ。そうでなければ、多くの「世代（繁殖の回数）」を経るうちに、当初の情報が劣化（散逸）してしまう。しかし、わずかの頻度で、この自己複製に「コピーミス」が生じると、ダーウィニストは仮説する。このコピーミスによって、新たなタイプの自己複製子が発生したことになる（もちろん、コピーミスの種類によっては自己複製さえできなくなっているかもしれない）。この新たなタイプの自己複製子をもふくめて、上記「2」の自然選択ゲームがなされる。ほとんどの場合は、コピーミスによって生じた新タイプ自己複製子は、既存の自己複製子との、競争に勝てない（なにしろコピー「ミス」によって生じたものだから）。しかし、ごくわずかの場合、新タイプの自己複製子のほうが、既存の自己複製子よりも、繁殖の度合いが勝る場合がありうる。このような場合には、新タイプの自己複製子が全体の場の中を、やがては「繁茂」していくことになる、だろう。こうして、さまざまタイプの生物の個体数の比率が変化していく（場合がある）。ダーウィニストにとって、生物界の変化のメカニズムは基本的にこれで尽きている。

（いま「繁殖の度合いが勝る場合」といった。では、「繁殖の度合いが同じ場合」はどうなるのか、という論点が生じる。これは非常に重要な論点で、これをめぐって、有名な木村資生の「分子進化の中立説」がある。が、「初級コース」の本稿としては、この論点は、捨象する。）

【あなたの「進化」観は、ダーウィン進化論となにも関係がない、か？】

したがって、以上三点を共有していない理説は、ダーウィン進化論とはいえない。

究極的には、たとえば「進化」という言葉をどうつかおうと各人の自由だろう。しかし現実には、今日において「進化」「進化的」「進化論」「進化論的」とかいったことばをつかってしまうと、それは、ダーウィンの進化論をかなりの程度さしてしまっている場合がほとんどだろう。ここに無用の紛糾が生じる

大きな源泉がある。上述のようにこの紛糾の責の一端がダーウィニスト自身にもないとはいえない。

しかし、犯人さがしをしてもはじまらない。とりあえずは、「あの人（あるいは「私」）の言う「進化的」という言葉は、ダーウィンの進化論とほとんど関係がないのではないか？」と懐疑するといいただろう。（たぶん、関係がないだろう）。

「〇〇の進化」「〇〇が進化する」「〇〇に関しての進化論的見方」などというときには、まず、上記の第一要素「自己複製子」の存在がはっきりしないことが大部分であろう。よって、そのような論圏にダーウィン進化論は、まったくつかえない。

【ほとんど「変化」しない】

上記三点からするとすぐわかるように、この三要素からなるメカニズムは、状況をほとんど変化させない。一次的近似としての直観的理解としては、ダーウィン進化論のシナリオにおいては、事態は保守的に再生産されるだけであって、変化はほとんどおこらないとおもっておいたほうがいいかもしれない。基本的に保守的な再生産のもとで、たまに変異が生じる。しかもその変異が既存者よりも再生産力がたかいという「さらに、まれ」な場合にのみ、生物の多寡が変化していく。

【進化は進歩を含意しない】

また、ここでゆっくりと生じる（かもしれない）「変化」も、「よくなる」ことを含意しない。たんに、「生き残った者たちが、生き残った」であるにすぎない。たしかに、「適応度の高い複製子が生き残る」という言い方をダーウィニストがいう場合もある。が、ここでの「適応度」とは、「次代に子孫を残せる程度」のことであり、「生き残った者たちが、生き残った」のたんなる言い換えでしかない。それにたいして一方、たとえば「進歩」などという場合には、「何らかの価値尺度からみて、『よく』なる、変化」という含意があるだろう。

したがって、ダーウィニストのいう「進化」は、「進歩」を含意しない。

【ダーウィニアン社会学ならびにダーウィニズムは、社会進化論ではない】

ダーウィニアン社会学をやろうとすると、スペンサー流のいわゆる「社会進化論」「社会ダーウィニズム」のイメージ（悪評？）とたたかわねばならなくなる。しかし、スペンサー流のいわゆる「社会進化論」「社会ダーウィニズム」は、上記の「(ダーウィン) 進化論のアナロジーで社会を見る見方」，そして／＼ないし、「ダーウィンの進化観とは異なった進化観」との混合である。よって、われわれの視点（「アナロジーでなく」かつ「ダーウィン進化論に依拠」と、スペンサー主義とは、まったく関係がない。

【普遍的ダーウィニズム】

上記で、ダーウィン進化論のエッセンスを三要素に分解して提示した。その際、第一要素において、「遺伝子」とのべずに、「自己複製子」とのべた。これは、上記の三要素からなるメカニズムが、論理的には、かならずしも生物の遺伝子の自己複製に「かざられるものではない」ということに鑑みて、である。

ここから、生物の遺伝子の自己複製を、その下位・特殊例（スペシャルケース）とするような「普遍的ダーウィニズム」という枠組みを提示することができる。じつは、上記の三要素からなるエッセンスは、この普遍的ダーウィニズムの記述なのであった（Dawkins, 1989）。

くりかえすと、上記三要素からなるエッセンスは、かならずしも生物遺伝子の自己複製に限定されない普遍的ダーウィニズムの枠組みである。そして、そこでの「自己複製子」が、「具体的に何」になるかによって、個別のダーウィン進化論が分出することになる。生物においては、その「自己複製子」は「遺伝子」である。では、生物遺伝子進化論以外に、普遍的ダーウィニズムのスペシャルケースとして何がありうるか？。よくいわれているのは、「コンピュータ・ウィルス」の自己複製論、と、ミーム（文化的模倣子）論である。

この事情を図示すると以下のようになる。

普遍的ダーウィニズム（自己複製子・変異・環境選択，の理論）

↓

（上記の「自己複製子」が「具体的に何」になるかによって，個別的ダーウィニズムが分出する。）

個別的ダーウィニズム 1 = 生物進化論（遺伝子・変異・自然選択，の理論）

個別的ダーウィニズム 2 = コンピュータ・ウイルス論（自己複製的ネットウイルス・変異・環境選択，の理論）

個別的ダーウィニズム 3 = ミーム（文化的模倣子）論（ミーム・変異・環境選択，の理論）。

個別的ダーウィニズム $n = \dots\dots$ （「論理的」には，個別的ダーウィニズムは，他にも「ありうる」）

【ダーウィニアン社会学は，進化ゲーム論，ではない】

ここで，いわゆる「進化ゲーム論」の位置づけ，ならびに，われわれのダーウィニアン社会学と進化ゲーム論との関係について述べておいた方がいいだろう。

進化ゲーム論や進化経済学に通じている読者のなかには，われわれがめざしているダーウィニアン社会学は，「進化ゲーム論をつかった社会学だろう」と予期しているかたも多いだろう。

↓

「ちがう」と考えていただきたい。（正確にいうと「かならずしも，そう，ではない」）。

まず，進化ゲーム論の位置づけを確認しよう。進化ゲーム論とは，おもに，上記の「普遍的ダーウィニズム」の枠組みに対するゲーム論的記述法・分析法

であると考えていいだろう。そうであるがゆえに、「自己複製子」が何であっても、(たとえば、経済におけるある企業戦略であっても)、それが、自己複製されると前提しうるかぎりは、適用可能な枠組みである。これが、「遺伝子」をあつかわない経済学においても、進化ゲーム論が適用可能な理由である。

【ダーウィニアン社会学は、ミーム論では、(かならずしも) ない。】

では、進化ゲーム論でないとすると、ダーウィニアン社会学は、普遍的ダーウィニズムの下位類型のひとつの「ミーム論」にあたるのか？

↓

これも「ちがう」と考えていただきたい。(正確にいうと、「かならずしも、そう、ではない」)。

【ダーウィニアン社会学は、普遍的ダーウィニズムの一特殊例ではない。】

では、ダーウィニアン社会学が、進化ゲーム論でも、ミーム論でも、ない、とすると、それは、上記の普遍的ダーウィニズムのどこにいちづくのか？。それは、普遍的ダーウィニズムの一下位類型ではないのか？。

↓

じつは、ダーウィニアン社会学は、普遍的ダーウィニズムの一下位類型では、(自然な意味においては)、「ない」のである。

↓

しかし、それは、なぜか？

だとしたら、それは、ダーウィニズムといかなる関係にあるのか。普遍的ダーウィニズムの一下位類型(特殊例)といえないものに、「ダーウィニアン」の名を冠していいのか？

↓

これらの三つの問いに回答することが、本稿のヤマである。これらに回答するためには、少しく迂回しなければならない。

↓

そのためには、いわゆる「進化心理学」の位置づけをのべ、進化心理学にたいしてダーウィニアン社会学がどのような関係に立とうとしているのか、を、述べなければならない。

【進化心理学？】

われわれの試み自体、近年のいわゆる「進化心理学」の隆盛をふまえている。しかし、「進化心理学」ということば自身、はじめて聞くかたには、誤解を招く場合があるようだ。

進化心理学という以上、人間の心理が「進化（変化）」していくさまを、記述・分析・説明する心理学であると思う方もいるようだ。

↓

「ちがう」とかんがえたほうがいい。

進化心理学とは、われわれヒトの「心身（とくに心理）」も、ダーウィン生物進化論の述べる自然選択の結果である、と仮説する心理学である。

で、そこから先は、論者によって微妙にニュアンスがことなるので、議論しにくいのであるが、一次的接近のために強引に簡便化してのべると、進化心理学の主流派は以下のようにかんがえる。

ダーウィン生物進化論の意味で、われわれヒトの祖先がヒトとなった時の環境（自然選択するところの「自然」）は、近・現代ないしさらにはいわゆる「有史以来」の社会とは、かなりことなつたものであつた。端的にいつて、それは、更新世における狩猟採集生活という生活環境であつた。進化心理学では、そのように、われわれヒトがヒトとしての遺伝的特質を獲得した際の環境を、EEA（environment for the evolutionary adaptedness）とよぶ（長谷川，長谷川，2000：116）。すると、EEA 自体、無色透明の環境ではなく、特有の自然環境・社会環境であつたから、そこで、われわれの祖先が獲得した遺伝的特質は、その特有な環境のなかを生き抜いていくのに有利な特質であつた可能性が高い。

そこから、たとえば、性差についてのありそうな予測、とか、異性の好みについてのありそうな予測とを、導出することができる。そして、このような予測が、実際の現在のヒトにおいて成立しているかを実証的に確認する。これが、進化心理学の基本的な研究手順といえる。

上述の図式に位置づけると、明確に、進化心理学は、普遍的ダーウィニズムの一特殊例にはいつている。それは、普遍的ダーウィニズムの一特殊例としての、ダーウィン生物進化論の一つ（一部門）である。つまり、進化心理学とは、生物学の一部門である。

【ダーウィニアン社会学は、進化心理学の成果に立脚する。が、それに満足しない。非 EEA 状況における、ホモ・サピエンスの（マイクロ・マクロ）行動分析＝ダーウィニアン社会学】

これにたいして、われわれ社会学者は、近・現代社会のヒトビトのふるまいを分析対象にすることが主たる任務となる。よって、非 EEA 状況において、ヒトビトがどのように振る舞い（マイクロ分析）、それが合成されることによって、全体としてどのような様相をしめすのか（マクロ分析）を、分析することを目指すことになる。

この意味でわれわれのアプローチは、Baileys の “Mismatch Theory” の発想法とかなり近いものとなる。すなわち、Baileys は、Paleopsychopathology を探求するうえで、ヒトの現在おかれている環境が、ヒトの祖先が適応したところの環境であった EEA とことなっていることに着目する。そして、この現今環境と EEA との「ミスマッチ」が、ヒトにさまざまな病理現象を生じさせているのではないかと仮説するわけである。

【ダーウィン進化論の視点は「必要」だが「十分」ではない。】

ふたたび、上掲の図式の位置づけにもどってみよう。

普遍的ダーウィニズムの枠組みがあるのだが、その一特殊例として、ダーウィン生物進化論があり、そのまた、特殊例として、進化心理学があるのであった。

そして、ダーウィニアン社会学は、この進化心理学がもたらしたヒトの属性（人間の本性と呼ばれることがある。かならずしもこの呼称には私は同意しないが。）についての知見に依拠する。しかし、ダーウィニアン社会学は、進化心理学とはことなり、ヒトがとくに非 EEA 状況でどのようにふるまうのかに照準するのであった。

では、とくにそのマクロ分析において、ダーウィニアン社会学は、進化ゲーム論のロジックをつかわないのか？。

↓

「つかうかもしれないし、つかわないかもしれない」。としか答えようがない。

くりかえすが、ダーウィニアン社会学にとって、進化ゲーム論の使用は、なら本質的（要件的）ではない。

まあ、「やってみないとわからない」が、現在のみとおしとしては、進化ゲーム論よりもむしろ古典的な非協力ゲーム論のほうを使う場合が多くなると直観している。なぜなら、進化ゲーム論においては、上記のように、「自己複製子」の存在が要件となるから。

したがって、ダーウィニアン社会学の探求にとっては、（上記の普遍的）ダーウィニズムの知見は、「必要」だが、まったく「十分ではない」、こととなる。非 ESS 状況で、ヒトがどのように振る舞い、それがどのように合成されるのか、ダーウィニズムの枠組みのみでこれを分析できるとはおもえない。

【万一、ダーウィン進化論の基本的仮説が否定されたとしても、だからといってかならずしも、ダーウィニアン社会学の諸命題が否定されるわけではない】

ここから、すこしく逆説的な議論上の帰結がしようじる。すなわち、「万一、ダーウィン進化論の基本的仮説が否定されたとしても、だからといってかならずしも、ダーウィニアン社会学の諸命題が否定されるわけではない」、ということである。

説明しよう。上記のようにダーウィニアン社会学は、ヒトの属性に関して、

進化心理学（をはじめとするダーウィン生物学）のもたらした知見に依拠する。しかし、ここで注意してほしいのは、ダーウィニアン社会学が依拠するのは、進化心理学の「知見」であって、そのダーウィニズム的「枠組み（グランドセオリー）」ではないのである。

「まちがったグランドセオリーから、正しい個別仮説が発想される」ということもありうる。進化心理学の眼目は、個別の仮説を実証にかける経験的科学性にある。よって、経験的に支持された個別仮説は、その仮説を発想する際に根幹となったグランドセオリー（ダーウィン生物進化論）の当否とは「論理的には独立に！」、経験的に確認された程度におうじて妥当となる。簡単にいえば、「もしダーウィン進化論がまちがっていたとしても、確認された事実は事実である」ことになる。

↓

そして、ダーウィニアン社会学が依拠するのは、こっちの「事実」のほうである。がゆえに、万一ダーウィン進化論が否定されるような事態が生じても、それだけからはダーウィニアン社会学の諸命題が自動的に否定されるわけではない。

【「醜言」発想装置としてのダーウィニズム】

ここですこしホンネをかたってしまえば、私がダーウィン生物進化論に依拠して社会学をやろうと決心した理由の一つは、じつはけっこう「状況主義的」なものである。ダーウィニズム生物進化論は、ヒトの属性にかんして、常識やタテマエ（「美言」）を逆なでするような帰結・仮説をもたらししてくれる場合がおおい。性差・集団規模・コミュニケーションの機能・自他欺瞞・美人・愛情・モラル・エスニシティ感情・自意識……などにかんして。その一方で、ダーウィン生物進化論自体が、現在（あくまで相対的だが）広くみとめられている「定説・常識」であるといえる。よって、前者の常識・タテマエを懷疑し批判していくうえで、ダーウィニズムに依拠するのは非常に能率のよい戦略であると考えたのである。

以上、われわれの目指す方途が、論理的にはじつはかなり「絞られた」アプローチであることをのべてきた。

↓

このことからある人たちは、このアプローチが分析間口の狭い脆弱なアプローチであるように直観するかもしれない。

↓

しかし、私はそうはかんがえない。むしろ、逆、である。

「ダーウィニズム」とか「進化論（的）」とかいうことばから連想されやすいあやふやで知的確実性が期待できないさまざまな可能性を、「われわれのダーウィニアン社会学は、それではない」と排除することによって、われわれのアプローチの頑強性をむしろ保持しようとした作業である、本稿は。

【ダーウィニアン社会学の具体的構想】

本稿では、一種の方法論的議論に終止して、ダーウィニアン社会学が「何でないか」の弁論に終止した。このようなことは、一言いえば済んでしまい、さっそく本アプローチの「内実」にふみこんでいけると見通していた。しかし、じっさいに世間のヒトのまえではなしをしてみるとその見通しはあまいようで、本稿程度の紙数で、ありうべき方法論的誤解をといておいたほうが、今後紛糾の種をのこさないことになる、と考えた。とはいえ、本稿だけお読みの読者には、ダーウィニアン社会学が何でないか、は、すこしはわかったとしても、何であるか、の具体的イメージがわかかなかつとおもう。この点は、手続き上の事情で「しようがない」とはいえ筆者としても遺憾であった。

以下、あくまで、概略、かつ、構想のレベルにとどまるが、筆者が目指しているダーウィニアン社会学の具体的内実を挙示しよう。多くはすでにドラフトを執筆済みで、ごく少数の方からコメントをちょうだいしている。

【1. ダーウィニアン社会学の「社会」理論】

非協力ゲーム論の貢献を評価しつつも、それに対する不満点を示す。すなわ

ち、人々の「選好」の形成に関する理論の不在、「意味」の理論の不在、「伝統」をあつかう理論の不備、である。われわれは、ダーウィニアン生物進化論に依拠することで、これらの不満の克服をめざす。すなわち、ソーバー・ウィルソンの議論を援用することで、ダーウィニアン選好理論を構築する。自他欺瞞の理論 (Trivers, 1985) を援用することで、意味の理論を構築する。「席卷しないがほとんど席卷されることのない戦略」という概念を提起することで、伝統を扱いうる視点を提示する。これらの改善点を、非協力ゲーム論にもたらし、社会全体にたいする変動をあつかうマクロモデルを提起する。

【2. ダーウィニアン社会学の「文化」理論】

議論の端緒として、昨今よく議論される、「エスニシティ」「ナショナリティ」の問題の考察からはじめる。はたして、よくいう「エスニシティ」「ナショナリティ」はたんなる想像の産物なのであろうか、あるいはその根拠となるなんらかの実体が存在するのであろうか。われわれは、ダンバー・ネトルの方言変異論を端緒にし、ブルデュー理論の難点に代替案を提起することによって、バビトゥス変異の同心円モデルを提起する。このモデルを採用することで、上記二問題双方に「否」と回答する。さらに、このモデルの副産物として、「ヒトはなぜ、ある場合に、『文化』についてかたまりたくなってしまうのか」「現代文化に関する分析は、なぜ、こうも『浅薄』で、『アドホック』にみえてしまう場合が多いのか」という二問題にたいして回答を与える。

【3. ダーウィニアン社会学の「コミュニケーション」理論】

なぜ、社会には、ウソのコミュニケーションが流通しているのか。あるいは、ウソの流通の一方でなぜホントも流通しているのか。両者の流通量の度合いは、なにによって規定されているのか。これらの問題を一つの統一的な視点から回答するモデルを、ダーウィン生物進化論における自他欺瞞の議論を展開することで提示する。

【4. ダーウィニアン社会学の「メディア」理論】

ヒトはなぜ、コミュニケーションメディアをつかうのか？ もちろん、さまざまな理由があるだろう。が、社会脳仮説を採用することで、その最たる理由は、「サル毛づくろい」のような機能をメディアによって果たすため、という仮説を提起する。この視点によって、さまざまなメディア使用における一見したところの理解しがたい諸現象を解釈する。つぎに、社会脳仮説の第二の主張である、霊長類のおのおのにおける「集団サイズ」の仮説をヒトにあてはめ、ヒトは、メディアをつかって「想像のムレ（共同体）」を生きているという仮説を提起する。この仮説によって、いわゆる想像の共同体論では理解が不十分であった、メディアと集団帰属性の問題に、光明をあてる。

【5. ダーウィニストによる「理解社会学の基礎付け」】

理解社会学という方法論は、近代社会学の成立とともに伝統のあるものである。しかし、それは、科学的手続きといえるのかという多くの懐疑にさらされてきた。本稿は、ダーウィニアン生物進化論における「心の理論」とよばれるアプローチを採用することで、この懐疑から理解社会学の立場を救済し擁護する。しかし、ひとたび、この視点にたつと、もはや、「理解社会学、か、行動主義、か」という二分法に安住することはできない。「[[[[心の理論/理論の理論]的認知・行動]にたいする「心の理論/理論の理論]的認知・行動]にたいする「心の理論/理論の理論]的認知・行動]...という、多重分岐入れ子構造の中に入り込むしかない。この多重構造のなかの許容される単純化として、理解社会学も行動主義もふたたび位置づけられることになる。(バドコック博士の講義・セミナーに大きく啓発された。記して感謝します)。

【6. ダーウィニアン社会学の「心の理論」-「親密性前線シフト」仮説-】

上記のように近代社会学の一大伝統である理解社会学と「心の理論」アプローチとは親和性をもつものである。さらに、「心の理論」のある論から非常に興味深い仮説を受け取ることができる。すなわち、ほとんどすべてのヒトは、世

に存在するほとんどすべてモノを、「心ある者」としてとらえるか「心なき物」としてとらえるかのどちらかである。異時点において同一対象（と当事者が思念するモノ）を、両方の属性をもつものとしてとらえることは可能であるが、同一時点において、同一対象を双方の属性をもつものとしてとらえることはかなり困難である、と。この「心ある者たち」と「心なき物ども」との境界線を「親密性前線」と呼んでみる。さらに現代社会学者としての筆者は、この「親密性前線」が近過去から近未来にかけて微妙に「変位」している、という仮説を提起する（親密性前線シフト仮説）。この「親密性前線シフト仮説」の例証として、「ロボットペット（アイボ）をめぐる親密化現象」「日本人少年による『理解しがたい殺人』」「自己の肉体にたいする『物』的快樂現象探求としての、『バイブレーター／ドラッグ』使用」「オーガズムと、近代親密性価値観（いわゆる「愛」）との乖離問題」などを分析する。

【7. 「ダーウィニアン社会学」的啓蒙、と、ダーウィニアン・ブッティズム】

ダーウィニアン社会学の視点・知見は、ではその社会に実際に生きているひとたちにとって、どのような利得をもたらしうるのか。この点にかんして、過度の期待はしないほうがいい。しかし、ダーウィニアン社会学は、社会に生きている当事者の皆さんの「無用な悩み」の一部を解除し、無用な悩みの社会マクロ的拡大再生産を解除する一助となりうる。このようなダーウィニアン社会学からの社会当事者への介入を『「ダーウィニアン社会学」的啓蒙』と呼んでみよう。他方、これと現実的にはかなりかさなるが、論理的には独立の営為として、ダーウィン生物進化論が、われわれ現代人の人生観自体に及ぼす影響をもたらすかかんがえることができる。いわば、ダーウィン生物進化論の哲学的含意である。これについても、過度な期待は禁物である。しかし、われわれは、ダーウィン生物進化論が、ひとびとにある種の仏教思想にも似た世界観・人生観を提示することをしめす。このような世界観・人生観を、ダーウィニアン・ブッティズムと呼んでみる。

【8. ダーウィニアン社会学（者）のダーウィニズムからの卒業】

ことさら、「ダーウィニアン社会学」などと旗色を染めてしまった。しかし、われわれの立場は、かんがえてみれば、至極当たり前・常識的なものである。多くのひとは、ヒトが生物の一種であることをみとめるだろう。そして、ダーウィン進化論が生物進化に関して最有力の理説であることを認めるひともおいだろう。というわけで、われわれの立場は、急速に「常識化」するかもしれない（この直観は甘すぎるかもしれない）。そうなったあかつきには、依拠しているが、あまりに前提となって意識していない、という意味において、ダーウィニズムからの「卒業」をわれわれはした、といいうるだろう。

【主要関連文献】

- Badcock, Christopher, 2000, *Evolutionary Psychology: A Critical Introduction*
- Baileys 1995 “Mismatch Theory and Paleopsychopathology”
http://www.hbes.com/HBES/abst95.htm#Mismatch_Theory
- Barkow, Jerome H.; Cosmides, Leda; Tooby, John (ed.), 1992, *The Adapted mind: evolutionary psychology and the generation of culture*
- Darwin, Charles, 1859, *On the origin of species: by means of natural selection* (=八杉龍一訳 1963 『種の起原』岩波書店)
- Dawkins, Richard, 1989, *The selfish gene* (=日高敏隆 [ほか] 訳 1991, 『利己的な遺伝子』紀伊國屋書店)
- Dunbar, R. I. M. (Robin Ian MacDonald), 1996, *Grooming, gossip and the evolution of language* (=松浦俊輔訳 1998, 『ことばの起源：猿の毛づくろい、人のゴシップ』青土社)
- Hamilton, W. D. (William Donald), 1996, *Narrow roads of gene land: the collected papers of W. D. Hamilton, v. 1*
- 長谷川寿一、長谷川真理子、2000, 『進化と人間行動』東京大学出版会
- 木村資生、1988, 『生物進化を考える』岩波書店
- Sober, Elliott; Wilson, David Sloan, 1998, *Unto others: the evolution and psychology of unselfish behavior*
- Trivers, Robert, 1985, *Social evolution* (=中嶋康裕、福井康雄、原田泰志訳 1991, 『生物の社会進化』産業図書)

【謝辞】本稿は、「現代進化論研究会@かごしま」のみなさんとの議論に、多くを負っています。記して感謝いたします。